



# 夕焼け通信

2019.12.16 1242号 編集 宮森健次

〒699-0823 島根県松江市西川津町4276-402  
miyaken@me.com gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/

手作りの暮らし2 35

## 木幡智恵美

干し柿 (5)

一回目、二回目と出雲の柿を収穫。すでに二百を超える数を採ったのに、まだ橙色の艶々した実が相当数ぶら下がっている。畑仕事を早めに終え、柿採りにかかった。

夫が高枝切りばさみで実を採り、私は下で実を枝から外す。傷ついているのは我が家分に、傷のない形の良いのを贈り用にと分けていく。贈る相手は、前回の大量収穫の際に柿をもらってくれた人たち。その人たちなら、柿の始末を面倒がらずにしてくれるだろう。

そうして分けている際、思わず「なんだこりゃ」と声をあげてしまった。双子の柿、しかも、それぞれに棘のようなものまで付いている。私の声に近寄ってきた夫も、「こんなの初めて見たわ」と手に取って眺めていた。

翌日は柿配りをし、我が家分の処理をする。今回は、松江の家の裏庭にある西条柿が食べごろになったので、合わせ柿はせず、全部干し柿にすることに。一回目、二回目とうまくできた干し柿は大概人にあげてしまった。今回は家用だ。百個近くあるけど、多ければまた人にあげればいいやと思いつながらどんだん皮をむき、荷造りロープでつないでいく。仕上げとして、沸かしていた熱湯に十秒ほど浸けて殺菌処理し、ペランダに吊るしていった。

そうして三〜四日経ったある日、柿をあげた人から電話が入った。「柿に黴がきたけど、どうすればいい」とのこと。「熱湯に浸けました?」と尋ねると、「さつとね」と言われる。「うちは十秒くらいしますよ」と答えると、「もう一回やってみるわ」とのこと。次の日、ふと思いつき、「焼酎を吹きかけたらどうでしょう」とこちらから電話をした。それもしたとのこと。結局はうまくいかず、そのまま冷凍することだった。

我が家で柿を干した際、黴が生えたことはない。それでもと思いつき、ペランダに行ってみた。うわっ、何と、うちのにも黴がきているではないか。



西藏旅行記

## 幸田和彦

5 (承前)

マイクロバスは低いギヤでエンジンをフル回転させながら高度を上げていった。出発から三時間、いよいよギャロラ峠にさしかかる。峠には五色の祈祷旗タルチョがはためいていた。私の高度計は四六〇五メートルを表示した。バスを降りて峠を散策する足取りは重い。この峠を下るといよいよ目指す湖である。段々畑では大麦と共に菜の花がたくさん栽培されていた。菜種油が貴重な現金収入になっているそうだ。

つづら折りにバスは下っていく。菜の花畑のその先に湖は見えてきた。ヤムドク・ユムツォは「トルコ石の湖」という意味だそう。晴れ間がのぞき始めた湖面はターコイズブルーに輝いていた。湖畔に出て一時間あまり、湖を時計回りに辿ってからマイクロバスは止まった。そこにはまるでフランスのモンサンミッシェルを思わせるような光景が広がっていた。モンサンミッシェルと違うのは四千メートルを超える標高と僧侶はただ一人という小さなお寺、そして観光客は我々しかないという贅沢な空間であった。若い坊さんが快く寺院を案内してくれる。途中イラクサを摘む女性達と出会う。ここにも人が暮らしていることに驚く。風景を堪能した後、しばし瞑想にふける時間がまた至極贅沢であった。湖畔で休憩していると羊がやってきた。その数、あつという間に百頭を超えた。羊飼いは十才くらいの少女とそのおじいさんの二人だった。カメラを向けると少女ははにかみ祖父の後ろに隠れた。我々が差しあげたスイカを土産に帰って行った少女。「外国人にもらったよ!」と弾んで家族に話すのだろうか。ずつと続く羊を追いつながらの生活に変化の兆しがあることを我々との出会いから想像することは少女にはできない。この地が観光地になりませんようにと勝手な願いを念じながら寺に向かって手を合わせた。

**30代フリーター** やあ、ジイさん。カネの使い方を批判されたZ O Z O創業者の前澤友作が、批判する相手に「お金に囚われムキになっている」「もつとお金から解放されたいのにな」とツイッターで反論していた。さんざん稼いでおいて何きれいごと言ってるんだと、また批判されただろうな。

**年金生活者** 彼の言葉は貨幣の物神性、つまりカネをありがたがる長年の社会習慣がわずかずつ衰退しつつあることの徴候と見ることができている。

背景にあるのは富の稀少性の縮減だ。資本主義とテクノロジの高度化がそれを加速し、カネがそれほどなくとも富を享受できる時代を到来させた。

M M T（現代貨幣理論）がいま勢いづいているのは、それが貨幣の物神性を解体する理論だからだ。M M Tは、自国通貨を発行できる政府はいくら借金をしても、通貨を増発すれば返せるのだから、債務不履行に陥ることがないと主張する。

由空間であり、何でも入るという意味で普遍的な空間だ。そこに魅力の源泉がある。かつてはその自由と普遍性を、モノを増やすために犠牲にしてきた。モノが自由と普遍性を獲得するための手段だったからだ。

その手段があり余るほどになり、ときには自由と普遍性を妨げるようになって、多くの人たちがモノを減らして、何もない空間の自由と普遍性を求めるようになった。モノより空間。キャッチコピー風に言えばそうなる。

**30代** それが貨幣の話と何の関係があるんだ。

**年金** 空間の価値の変化は時間の価値も変えた。カネより時間、とそれを言いあらわすことができる。かつては、モノを得るためにカネを求め、カネを得るために時間を犠牲にした。その時間もまた何もない空間と同様に自由と普遍性を備えている。モノがいつぱいになつたぶん、時間を犠牲にしたくないと思うようになるのは必然といつていい。

だから、政府は増税したり、節約したりしてカネをかき集める必要はない。政府にとって財政を黒字にするのと、すなわちカネを貯めることは全く無用なことだ、とM M Tは言う。蓄財の必要がないということはカネをありがたがる必要がないということだ。

**30代** どの国の政府も財政を黒字にすることにこだわっている。

**年金** 貨幣の物神性の衰退は徐々にしか進まない。マルクスは『資本論』で貨幣の正体を商品と考え、その分析を通して物神性の理論的な解体をはかった。だが、貨幣を商品と考えることは貨幣を実体として扱うことなので、物神性を完全に消去することはできなかった。それでも現実の経済では、変動為替相場制への移行、金本位制の廃止によって、物神性の衰退は次第に進んだ。現在それを加速しているのが富の稀少性の縮減にほかならない。

M M Tは貨幣を実体ではなく、機能と考える。富を移動させる機能だ。少なくとも国家にとっては、貨幣はあり

モノ消費からコト消費へ、と言われる現在の消費のトレンドは、モノ消費から時間の消費へ、と言い換えることができる。

**30代** カネがありがたいものでなくなると、利潤を追い求めることもなくなり、資本主義が成り立たなくなるな。

**年金** だれも利潤の追求をしなくなつたとしても、それで市場経済が消滅するわけではない。

がたがる対象ではなく、いつてみれば仕事をやる数字ということになる。もし政府が貨幣をそのように扱うようになれば、国家レベルでの貨幣の物神性は解体する。それはやがて社会レベルでの物神性の解体を促すはずだ。国家の民主化が経済の民主化を促したように。

**30代** もつと日常の実感に即した説明ができないのか。

**年金** このあいだ自宅のエアコンの取り換え工事のため、周りからソファやテーブルをどかしたら、そこにできた空きスペースを工事後そのまましておきたい気分になった。何もかも間がそれくらい魅力を増しているといつていい。何もないというのは科学的な意味で何もないということではなく、人間のつくつたモノがないという意味だ。

近代文明は空間を人間のつくつたモノで埋め続けてきた。その豊かさに文明が飽き始めてきた。何もない空間は、何でも入れられるという意味で自

柄谷行人は各歴史段階に支配的な交換様式として交換様式A（互酬⇨贈与と返礼）、交換様式B（略取と再分配⇨支配と保護）、交換様式C（商品交換⇨貨幣と商品）の3類型をあげ、それらを止揚した想像上の様式として交換様式Dを想定した。現在の資本主義はこのうちCが支配的なシステムだ。もしもいつかわからない未来にDが支配的になったとしても、それはあとの3つの様式を包括したものと考えられているから、Cに支えられた資本主義の諸側面が影も形もなくなることはない。

以上から言えることは、資本主義が終わるかどうかという問いの立て方自体を疑ってみないと、いま世界が当面している未知の事態をつかみそこねる恐れがあるということだ。冷戦の終結とともに資本主義か社会主義かといった空間的な囚われから解放された私たちはいま、資本主義が終わるかどうかといった時間的な囚われからも解放されなければならないように思える。

ニュース日記 720  
**中村 礼治**

## カネがありがたくなるとき